

令和2年度

鳴門教育大学大学院学校教育研究科

教科・領域教育専攻 生活・健康系コース（保健体育）

修士論文公開審査会

芸術・体育系教科実践高度化コース 保健体育科教育分野

教職大学院構想発表会



日時：令和3年2月11日（木）9：00～12：10

場所：B101 教室



令和2年度生活・健康系コース(保健体育) 修士論文公開審査会

令和2年度芸術・体育系教科実践高度化コース保健体育科教育分野教職大学院構想発表会

(1) 日時: 令和3年2月11日(木)

(2) 場所: B101教室

(3) 次第

1)開会の辞: 松井敦典先生 8:55～

2)修士論文公開審査会 9:00～10:00(発表5分・質疑15分)

3)教職大学院構想発表会 10:10～12:05(発表10分・質疑5分)

		氏名	指導教員	開始時間	論文課題	
修論審査	1	大原 航平	藤田 雅文	9:00	中学校サッカー選手とクラブチームサッカー選手の意識に関する比較研究 -サッカー有能感・ライフスキル・学校生活スキルの比較-	
	2	小川 浩平	湯口 雅史	9:20	コロナ禍における体育授業の実際	
	3	釜 圭吾	湯口 雅史	9:40	体育科におけるジレンマの発現に関する一考察	
休憩10分						
		氏名	実習責任教員	開始時間	研究課題	
構想発表	4	山田 純平	藤田 雅文	10:10	中学校におけるサッカーの授業研究 -日本サッカー協会の指導マニュアルを用いて-	
	5	森本 千晶	湯口 雅史	10:25	多様な子どものニーズに対応できる教師力の育成 ～学ぶ者の論理に沿った授業づくり～	
	6	和田 壮平	湯口 雅史	10:40	「運動嫌い」「体育嫌い」な子どもが主体的に運動へ取り組める授業づくり ～生涯にわたる心身の健康の保持増進と、豊かなスポーツライフの実現を目指して～	
	休憩10分					
	7	江尻 沙和香	湯口 雅史	11:05	運動の本質的なおもしろさに夢中にさせる授業づくり	
	8	佐川 寛和	湯口 雅史	11:20	「子どもの主体性を発揮させる体育科の授業づくり」 ～「まなびほぐし」の考え方を活かして～	
	9	安岡 秀人	松井 敦典	11:35	体育授業における子ども同士の教え合い活動	
	10	篠原 健真	松井 敦典	11:50	体育授業における準備運動についての実践研究 -動きづくり・身体づくりの視点から-	

中学校サッカー選手とクラブチームサッカー選手の意識に関する比較研究

ーサッカー有能感・ライフスキル・学校生活スキルの比較ー

教科・領域教育専攻

生活・健康系コース（保健体育）

指導教員 藤田雅文

大原 航平

I. 緒言

1993年に開幕したJリーグが、地域で活動するクラブに与えた影響は大きく、この年を境に地域サッカークラブは全国で急激に波及していった。一方で、文部科学省は、教員の働き方改革として、休日の部活動を教員が行うのではなく、段階的に地域に移行していくと示した。このように徐々に部活動を縮小していこうとする動きがあるが、学校部活動に期待される社会的規範の享受等の「人間教育」が、地域のクラブチームにおいても機能しているのかについては疑念を抱く。そこで、本研究では、クラブチームと中学校部活動のサッカー選手のサッカー有能感¹⁾、ライフスキル²⁾、学校生活スキル³⁾に関する意識の実態にどのような相違点があるかについて明らかにしていくことを目的とした。

II. 研究方法

1. 調査の対象

K 県の中学生年代のクラブチーム 3 チーム

A : 62 名, B : 17 名, C : 52 名,

K 県の中学校サッカー部 4 チーム

D : 30 名, E : 16 名, F : 17 名, G : 30 名,
計 224 名

2. 調査の方法

(1) 訪問・留置法による質問紙調査

(2) クラブチームのスタッフに対する電話インタビュー

3. 質問紙調査の内容

(1) 回答者の属性

①学年 ②サッカー経験年数

③ポジション ④選抜経験

(2) サッカー有能感

①状況に応じたパス&コントロール

②ドリブル技能 ③守備技能

④ヘディング技能 ⑤スピード

⑥力強さ ⑦競技意欲

⑧リーダーシップ

(3) ライフスキル

①目標設定 ②考える力

③ストレスマネジメント ④感謝する心

⑤コミュニケーション ⑥挽回行動

⑦謙虚な心 ⑧礼儀・マナー ⑨体調管理

(4) 学校生活スキル

①自己学習スキル ②進路決定スキル

③集団生活スキル ④健康維持スキル

⑤同輩とのコミュニケーションスキル

4. 分析方法

Microsoft Excel 2018 を用いて単純集計、クロス集計及び平均値の差の t 検定を行った。また、統計ソフト js-STAR により χ^2 検定を行った。

Ⅲ. 結果と考察

1. サッカー有能感

各回答者のサッカー有能感の合計点を算出し、クラブチームと中学校サッカー部の選手全体の平均値と標準偏差を算出し、両群の間にサッカー有能感に違いがあるのかを分析した。その結果、0.1%水準で有意差が認められ、クラブチームの選手の方が明らかに高いことが判明した。

2. ライフスキル

各回答者のライフスキルの合計点を算出し、クラブチームと中学校サッカー部の選手全体の平均値と標準偏差を算出し、両群の間にライフスキルに違いがあるのかを分析した。その結果、0.1%水準で有意差が認められ、クラブチームの選手の方が明らかに高いことが判明した。

3. 学校生活スキル

各回答者の学校生活スキルの合計点を算出し、クラブチームと中学校サッカー部の選手全体の平均値と標準偏差を算出し、両群の選手の間で学校生活スキルに違いがあるのかを分析した。その結果、0.1%水準で有意差が認められ、クラブチームの選手の方が明らかに高いことが判明した。

4. サッカー有能感のチーム間の差

最も平均値の高いCチームと他のチーム間に、サッカー有能感に差があるのかを分析した結果、クラブチーム間には有意差は認められなかったが、中学校の全てのチーム間で0.1%水準の有意差が認められ、Cチームの方が有意に高いことが判明した。

5. ライフスキルのチーム間の差

最も平均値の高いCチームと他のチーム間にライフスキルに差があるのかを分析した結果、クラブチームのAチームと中学校のDチーム間

には有意差は認められなかったが、それ以外のチーム間では0.1%水準の有意差が認められ、Cチームの方が有意に高いことが判明した。

6. 学校生活スキルのチーム間の差

最も平均値の高いCチームと他のチーム間に学校生活スキルに差があるのかを分析した結果、クラブチーム間には有意差は認められなかったが、中学校の全てのチーム間で0.1%水準の有意差が認められ、Cチームの方が有意に高いことが判明した。

Cチームは、加入時にセレクションを行い、選抜経験のある選手が多く所属し、練習環境と指導スタッフが整っているため、サッカー有能感が高いと考える。また、ミーティングを頻繁に行い、選手同士、指導者と多くコミュニケーションをとっており、個人面談やチームで勉強会を行っているため、ライフスキルと学校生活スキルが高いと考える。

Ⅳ. 文献

- 1) 安部久貴・村瀬浩二・落合優・射手矢岬・鈴木直樹(2018), 指導者の言葉がけがユース年代の選手のサッカー有能感に与える影響, 体育学研究, 63(1) : 87-102.
- 2) 清水聖志人・島本好平・河野隆志・山本浩二・岡井理香(2018), ユースアスリート用ライフスキル評価尺度の開発, 2018年度笹川スポーツ研究助成 : 208-213.
- 3) 飯田順子・石隈利紀, (2002), 中学生の学校生活スキルに関する研究—学校生活スキル尺度(中学生版)の開発—, 教育心理学研究, 50(2) : 225-236.

コロナ禍における体育授業の実際

教科・領域教育専攻

生活・健康系コース（保健体育）

小川浩平

指導教員 湯口雅史

1. 緒言

2019年12月に中国・武漢市で報告された原因不明の肺炎は、「COVID-19」（新型コロナウイルス感染症）と名付けられ、世界中に拡散された。日本国内では、2020年3月下旬時点における感染者急増を受け、政府は全国を対象とした「緊急事態宣言」を出し、感染拡大防止へ向けて外出自粛の呼びかけや飲食店の時短営業などの要請を国民に呼びかけた。文部科学省は、緊急事態宣言を受け、全国の小中高校に2月27日、3月2日からの一斉休校を要請した。2020年5月25日に緊急事態宣言が解除された際に、徳島県は「緊急事態宣言の解除に伴う教育活動の再開について」の通知を出し、2020年5月21日（木）から、分散登校ではあったが、学校を再開した。文部科学省も、学校の教育活動を再開するにあたって、児童生徒等及び教職員の感染リスクを可能な限り低減することを目的とした『学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル』～『学校の新しい生活様式』～について（2020/5/22）を示した。しかしこの通知は、「本マニュアルは、令和2年5月時点での最新の知見に基づき作成したものです。今後新たな情報や知見が得られた場合には随時見直しを行うものであることを申し添えます。」ともあり、2020年6月16日、8月6日、9月3日と通知され、現在12月3日のものが最新となっている。このように、学校での感

染防止に向けて、国、地方自治体、学校現場が一体となり、コロナに関する様々な情報を共有しながら、網渡り的に日々を過ごしているのが現状である。

このような状況のなか、小学校においては新学習指導要領（平成29年告示）が全面実施となる年であり、資質能力をベースとした学習展開が期待されていた。

しかし、学校現場の状況は、学校の新しい生活様式に示されているように、『密閉』、『密集』、『密接』の『3つの密』を避ける、『人との間隔が十分とれない場合のマスクの着用』及び『手洗いなどの手指衛生』など、基本的な感染対策を継続することが求められている。特に体育授業は、子ども同士の接触回数や大声での応援等が存在し、従来のような体育授業を実践できないのではないかと想像する。

そこで、コロナ禍という難しい状況の中で、先生方はどのような創意工夫をしながら子どもに運動機会の保障と、運動する楽しさを味わわせているのだろうかと関心を寄せたのである。今後、with コロナ・アフターコロナを見据えての体育授業を行っていく上で、どのような工夫を行って進めていくのだろうか。コロナ禍におけるよりよい体育授業への志向はどのような実状なのだろうか、その実際を探索していきたいと考えた。

2. インタビュー調査

2-1. 目的

本研究は、徳島市内の小学校では、体育授業をコロナ禍の中でどのように実践しているのかを、インタビューを通して知り、各小学校、各先生方の、コロナ禍における体育授業への取り組みの共通部分を検討していく。さらに、体育授業における、先行研究の授業実践をもとに、比較をすることで、今後のコロナ禍における体育授業の検討やアフターコロナの体育授業に活かすことを目的とする。

2-2. 方法

(1) 研究対象

徳島市内の小学校に勤務している体育主任や体育を研究教科としている6人の教員

(2) データ収集法

半構造的インタビュー

(3) 分析方法

テキスト分析用ソフトウェア KH Coder

2-3. 結果と考察

徳島県内の小学校教諭にインタビューを行い、その分析結果から、当事者の心理や見方、考え方、感じ方を理解しようとし、「体育学習の実際」について考察した。その中で次のことが見えてきた。

① 単元計画の入れ替え

② 学校単位での取り決め

③ 教師のコロナ禍での授業づくり

3. ポストコロナへの展望

with コロナの実践において、「物の共有を控える」「一人一つのボールを用意する」「物を触

った手で顔を触らないよう声掛け」などの取り組みのもとで体育学習が始まったが、単元が進むにつれ、「ボールの共有を行っても、授業中に手で顔を触らない、授業後に消毒をする」など、問題がない範囲を見つけ、ボール運動を実施する、先生方の実践に基づく知見を得られたと考える。全てを制限してしまえば、子どものストレスになりかねない。子どもが精一杯運動できる授業にするためには、岩田（2005）が述べる「やさしい教材づくり」や今回改訂された新学習指導要領にも記述されている、「簡易化されたゲーム」や「易しい場」の工夫が必要である。従来のようなペア学習や、人と人が長時間接触するような手つなぎ鬼などは避ける必要があるが、作戦タイムで密になりすぎない、場を広くとるという工夫は、コロナ禍の体育授業として有用だったと考える。

ポストコロナの体育について、インタビューで得たことや先行研究などの蓄積した知見をもとに、場・教材等の工夫が必要であることは当然である上に、子どもが、精一杯運動ができる授業を実践していかなければならない。今後は、密や人と人の長時間の接触を控える取り組みが、コロナが収束するまで必要である。コロナ感染症拡大のおそれも収まり、子どもが、友達と夢中になって運動に取り組むことができるようなビフォーコロナ時代の体育授業が実践されることを切に願う。

体育科におけるジレンマの発現に関する一考察

教科・領域教育専攻

生活・健康系コース(保健体育)

指導教員 湯口 雅史

釜 圭 吾

1. 研究動機

OECD の Education2030 プロジェクトの中で「エージェンシー」という新しい概念が提唱された。DeSeCo プロジェクトで定義されたキー・コンピテンシーに立脚して、3つのコンピテンシーのカテゴリーを「変革を起こすコンピテンシー」として特定した。「新しい価値を創造する力」、「責任ある行動をとる力」、「対立やジレンマを対処する力」である。ここで注目したのが「対立やジレンマを対処する力」である。

体育授業の中で「対立」や「ジレンマ」がどのように発現し、また、それをどのように対処してコンピテンシーやエージェンシーの育成につながっているのだろうか疑問を持った。

そこで、本研究では小学校の体育授業に参加観察者として入り込み体育授業の様子を観察し、「ジレンマ」が発現する場面について観察記録を取り、授業中に起こったエピソードに着目して考察を進める。また、小学校の体育主任等の先生方に、体育授業をしている中で「対立」や「ジレンマ」が子どもの中で発現しているのかどうかを、インタビューを通じて得られたデータを元に SCAT 分析を用いて考察を行う。それらを元に体育授業におけるジレンマの発現についての解釈を目的とする。

2. 研究方法

(1) フィールドワーク

①研究対象

徳島県内の H 小学校(全校児童 27 名)

徳島県内の J 小学校(全校児童 81 人)

②データ収集法

・参与観察

③分析

・エピソード記述による分析を行う。

(2) インタビュー

①研究対象

徳島市内の小学校教員 7 名

②データの収集

・半構造的インタビュー

③分析

・SCAT のフォーマットを作成し分析を行う。

3. 考察

エピソード記述からジレンマの発現について考えられることとしては、以下のことがある。

- ・自分のための行動をとるか集団のためになる行動をとるかを選択する状況。
- ・周りから見られている中、場を選択しなければならない状況。
- ・誰かにパスを出さなければならない状況。
- ・友達とのかかわりで、するかしないかという選択を迫られた状況。

SCAT 分析からは以下のことが考えられる。

- ・技能が高い子が体育の評価が高いという体育観が形成している子どもに社会的構成主義に基づく体育授業を行ったとき単元初めにジレンマが発現する。
- ・集団種目において、自分がしたいことをするか、集団に協力するかというところでジレンマが発現する。
- ・技能が高くこだわりが強い子にジレンマが発現しやすい。
- ・周りに流されやすい子はジレンマが発現しにくい。
- ・低学年では、学習観の形成がされていないことや、自分の欲求に素直であるため、ジレンマの発現が見取りにくい。
- ・高学年になると、体育やスポーツクラブの経験の蓄積から体育観やスポーツ観が形成されることでジレンマが発現しやすい。
- ・ジレンマが発現し、技能の向上思考からめあてにあった思考へと体育観が変容する。
- ・ジレンマの発現から、自分のための行動から集団のための行動に変容することがある。
 - ・対立は、個人種目よりも集団種目に多く発現する。
- ・対立は、子どもの価値観のぶつかり合いにより発現する。
- ・単元終盤にかけて、対立は減少していく。
- ・対立が発現したあと、ジレンマが発現する時がある。

4. 結論

エピソード記述と SCAT 分析から、体育授業ではジレンマや対立が発現することが分かった。

子どもが体育の授業の中で状況とかわり、いくつかの選択肢の中から選択しようとする場

面があることが、ジレンマが発現する要因であった。教師が一方的に指示することで、子どもが選択をするという状況が少なくなり、ジレンマが発現しにくくなっていた。ジレンマの発現においては、教師が、子どもの活動をサポートするような立場に立つことが大切である。また、社会的構成主義の授業を行うことで意図的にジレンマが発現することが分かった。

個人活動の運動領域と集団活動の運動領域では、ジレンマの発現の見取りやすさに違いはあるもののジレンマは発現することが分かった。

ジレンマが発現し、それを克服しようと学びを進めた結果、子どもの行動や思考の変容もみられた。また、ジレンマが発現しやすい子の特徴として、体育への学習意欲が高かったり、技能向上の欲求が高かったりする子に発現しやすく、周りに流されやすい子はジレンマの発現が見取りにくく発現しにくいことが分かった。そして、ジレンマの発現には、子どもの発達段階が関係しており、低学年では、ジレンマが発現しにくく、高学年ではジレンマが発現しやすいことが分かった。

今回明らかになったのは、社会的構成主義に基づいた体育授業における「ジレンマ」や「対立」の発現についてである。子どものジレンマの発現により、子どもの行動や思考が変容していた。それは、コンピテンシーやエージェンシーの育成につながると考えられる。今後は、筆者自身が授業実践するにあたって、社会的構成主義に基づく体育授業の構築を目指し、その中で、子どもが状況に応じた選択を自ら行い、ジレンマを克服してコンピテンシーやエージェンシーを育成していけるような授業づくりをしていきたい。

中学校におけるサッカーの授業研究
ー日本サッカー協会の指導マニュアルを用いてー

芸術・体育系教科実践高度化コース

保健体育科教育実践分野

実習責任教員 藤田雅文

山田純平

I 緒言

日本サッカー協会は、日本代表を強化するための「競技スポーツ」における選手育成と、技能レベルに応じた社会人リーグの整備等の「生涯スポーツ」の両面から、人々がサッカーに取り組める環境設備に努めている。また、日本サッカー協会は、小学校体育におけるサッカーの学習指導の支援も行っており、その内容について『サッカー指導の教科書』（日本サッカー協会、2014）にまとめている。

『サッカー指導の教科書』では、サッカーの授業を「ウォーミングアップ」⇒「活動1」⇒「活動2」⇒「ゲーム」の4つのパートで構成している。この「教材の構成」は、「原則として単元全体のねらいからの逆算を意識したもの」になっている。また、学校体育全体の見通しとして、サッカーを生涯スポーツにつなげるため、「その学年、その子に応じた『楽しむ』」を積み上げることが必要であると示し、楽しむことの積み上げは「技能が向上していくこと」であり、その技能の向上が生涯スポーツにつながるとも述べている。

一方、中学校学習指導要領(平成29年度告示)解説保健体育編に記述されている球技(ゴール型)の知識及び技能の目標は、「ボール操作と空間に走り込むなどの動きによってゴール前で攻防をすること」である。

今回の授業研究では、筆者が専門としている

サッカーの授業に焦点を当て、技能が向上することで「楽しむ」を積み上げる授業展開について検討することとしたい。

II 課題設定の経緯

今回の課題設定は、第1回目のフィールドワークを通して、保健体育科の先生にサッカーの授業内容を確認したところ、サッカーの授業は、11月から12月の期間に持久走と並行で行い、内容は持久走を行った後にサッカーのゲームを行う、といった回答であったことが誘因となった。

著者自身も中学生時のサッカーの授業は、ゲーム形式だけであり、中学校学習指導要領(平成29年度告示)解説保健体育編で記述されている目標を達成するような授業ではなかった。

生徒はサッカーのルールは、ある程度は理解しているであろうが、ゲーム形式だけでは知識及び技能の理解・向上は見込まれないと考える。また、運動が得意な生徒と苦手な生徒の二極化が拡大する可能性もあると考える。

そこで、JFA公認C級コーチライセンスを取得している著者は、日本サッカー協会が出版しているサッカー指導教本をもとに、授業展開を考案し、実行することで、生徒の技能を向上させ、新たな知識を学ぶことで「楽しむ」を積み上げられることができ、サッカーを通してスポーツの深みと面白さを体感することができる

のではないかと考えた。

Ⅲ 方法

生徒に「形成的授業評価」「運動有能感」を基にした調査票及び授業後の振り返りシートを記入してもらう。授業の実践前と実践後の変化を記録し、何がどのように変化したのかをグラフ化し、どの項目で有意差が現れたのかを検証する。

Ⅳ 実践研究

1 単元の授業だけでは、技能の向上を図ることは難しいと考える。しかし、技能向上の意欲は高まると考える。

今回の課題研究では、「楽しかった」で終わるのではなく、「もっと知りたい」などの将来の生徒の豊かなスポーツライフの形成に繋がるような授業を実践していきたい。

また、今回の研究授業では、運動が得意な生徒と苦手な生徒が、同じように「楽しい」と感じるような授業を考えたい。

4月から行われる「教科実践フィールドワーク」の配属校は、まだ決まっておらず、サッカーの授業の時期も分からない。そのため、今回の研究課題の授業が行えない可能性がある。その場合には「部活動」と「保健」の研究課題を代替としたいと考えている。

実習先でサッカー部の指導をさせていただけるのであれば、第1回のフィールドワークで気になった子どもたちの「跳躍力」に関する研究課題を考えており、子どもたちの今後に繋がるような内容にしたいと考えている。

Ⅴ 結果の予想

調査票と振り返りシートの結果は、サッカー

経験者と未経験者で異なると想定しているが、「がんばれば上手くなる」「楽しい」「作戦を考える」などの「統制感」「意欲・関心」「思考力」は高められるのではないかと予想している。

文献

1)文部科学省(2018)中学校学習指導要領(平成29年告示)解説保健体育編, 東山書房, pp.121-122.

2)日本サッカー協会(2014)サッカー指導の教科書—小学校体育全学年対応, 東洋館出版社, Pp.150.

3)佐藤亮平・近藤雄一郎(2015)学校体育におけるサッカーの指導の教育内容と教材の変遷に関する一考察、北海道体育学研究, 50:81-91.

多様な子どものニーズに対応できる教師力の育成
～学ぶ者の論理に沿った授業づくり～

芸術・体育系教科実践高度化コース

保健体育科教育実践分野

実習責任教員 湯口雅史

森本千晶

1 テーマ設定の理由

(1) 教育実習の授業実践からみえた自己課題

授業を進めていく中で、挙手をする子どもの数が突然減ってしまうという経験をした。この原因として、子どもが答えた内容が想定外のものだったため、それをうまく授業に取り入れることができず、子どもの内に不安感が大きくなってしまったのではないかと考える。

(2) 教科課題設定 FW で学んだこと

私が FW に行かせていただいた学校は小規模の学校で、授業場面だけでなく学校生活のほとんどが子ども主体となっているという印象を受けた。算数の問題を解く場面では、子どもの様子を見守りながら、どこまで理解していて、何に困っているのかを把握しようとしたり、事前にどこでつまづきそうか・間違いが出そうか・意見が分かれそうかななどできるだけ多くの事象を予想したり、対応策について考えたりしているという話を伺った。これが十分にできていないと授業の流れが止まってしまう、子どもの思考も止まってしまうのかもしれないと考えた。また、授業導入時に行う「聞き取りゲーム」では、わざと間違えるように設定しており、子どもが「恥ずかしい」などマイナスの感情を抱かないための環境づくりや声かけの工夫をたくさん見ることができた。理科の実験で、予想と結果にズレが生じたとき、子どもから「3年生にもこの結果を教えあげたい！」という言葉が出てきた。この

ような FW での経験から、学習を通して子ども主体の「新たに知ったことを誰かに伝えたい。」と思える展開があるような授業を実践してみたいと思った。

2 課題

私は、子どもが誤った回答をした際に、子どもが何故そのような回答をしたかを考えずに訂正をし、授業が計画通りに行われるよう誘導してしまった。その原因として、効率性を重んじる論理に沿って学習させようとしてしまっていたことが考えられる。そうではなく、子どもには一人一人の学ぶペースがあり、誤ったり、試行錯誤したりしながら学ぶことが、学習している者にとって重要な意味をもつのである。教師は、学んでいる子どもに情報や助言を与えるが、基本的には教師と子どもが同じ対象(課題)に対して、共に困り、悩み、喜び、感動し、考え、解決することのできるような授業を子どもとつくっていく必要があると強く感じている。

これらのことから、子ども一人一人が自分のペースで学びを行え、子どもと教師が主と主の関係で授業が展開できるような教師力を身に付けたいと考えた。

3 先行研究の検討

(1) 子どもありきの考え方

平野(2017)¹⁾は、「子どもありきの授業とは、教師主体ではなく子ども主体で展開されていくもの、教育の出発点は子どもで、教育は子ども一人一人の事実に基づいて考え

ていくもの」と述べている。つまり授業を構想するとき、子どもに何を覚えさせたり、できるようにさせたりするのではない。「今一人一人の子どもが『何をどのように考え、感じ、どうしようとしているのか、どういうことで困っているのか、どのように追及し、学ぶのか』などの事実を明らかにして、それを元に、支援・指導のあり方が決まる。」¹⁾と述べている。また、教師が求めてない回答が出た時に、教師がどう対応するかで、子ども一人一人や学級の雰囲気が変わるのである。教師が「間違えてもいいよ。」と言いながら、間違えると「違います。」と真っ向から否定してしまうと、間違えることは“いけないこと”，“恥ずかしいこと”と子どもは認識し、自分の考えをありのままに現すことができなくなったり、発言する意欲が無くなったりしてしまう。そうではなく、答えをうまく拾い、授業に生かすことで子どもは得意になって、手を挙げ、発言する喜びを実感することができるようになる。すなわち、子どもの学習意欲の喚起は、教師のかかわり方が大きく影響するのである。

(2) 体育授業での環境づくり

子どもが体育授業に主体的に取り組むためには、一緒に授業を受けている友達との関わり方が大きく関係している。学習の場がやる気を高める雰囲気かどうかは教師の子どもたちへのかかわり方がどうかで左右される。

中込ら(2012)²⁾は、動機づけ雰囲気には、熟達雰囲気と成績雰囲気の2つに大別されると述べている。熟達雰囲気は、努力することや学習そのものに価値が置かれたプロセス重視の雰囲気である。対して、成績雰囲気は、良い記録や結果を出すことに価値が置かれ、結果を重視しているものである。それぞれの動機づけ雰囲気にはいくつかの要因

が含まれているが、クラスが熟達雰囲気であると捉えている子どもは、練習に一生懸命取り組み、授業で緊張や不安を感じることなく、動機づけが高い²⁾ことが明らかになっている。

(3) 「PMメソッド」を用いた実践研究

福本(2015)³⁾が行った実践研究は「客観主義」の前提に立っていたA教師の授業が「PMメソッド」によって「構成主義」を志向する授業へと改善された実践事例である。

A教師は「子ども主体の授業に改善したい」と思っているが、実際は「教師主導」の「客観主義」による授業から抜け出すことができず苦しんでいる。自身の授業を改善するために「PMメソッド」を活用し、「客観主義」による指導行動が無意識に不適切な形で出現してしまう「授業の癖」を視覚化した。福本が授業後にカウンセリング及び処方箋を行い、授業改善を図った。8つの指導行動を授業で意識することによって自らの指導行動の癖を克服することができることから、短期的で授業改善を図ることが可能になることが示された。この福本の研究は筆者が主免教育実習で明確になった課題解決に援用できるものがあると考えている。

4 方法

授業の様子をビデオ撮影し、授業後に振り返り・改善を行なっていく。(PMメソッド)

5 引用・参考文献

- 1) 平野朝久「はじめに子どもありき」東洋館出版社(2017年3月30日)
- 2) 中込四郎, 伊藤豊彦, 山本祐二「よくわかるスポーツ心理学」ミネルヴァ書房(2012年3月10日)pp.90-91
- 3) 福本義久「構成主義を志向した授業改善を図る枠組みの実践的研究—PM式指導類型による「PMメソッド」の提唱—」四天王寺大学紀要第60号(2015年)pp.301-322

「運動嫌い」「体育嫌い」な子どもが主体的に運動へ取り組める授業づくり
～生涯にわたる心身の健康の保持増進と、豊かなスポーツライフの実現を目指して～

芸術・体育系教科実践高度化コース
保健体育科教育実践分野
和田壮平

実習責任教員 湯口雅史

1 テーマの設定理由

今年度の教育課題設定FWでは、授業に「積極的な子」と「積極的でない子」が見られた。後者は、跳び箱の授業で順番待ちをしている時、やらずに後ろに回ってしまう子、体操服を忘れて授業を休んでしまう子、教員や筆者が声をかけるまで自ら授業に取り組もうとしない子などが挙げられる。また、ゼミで行ったFWの振り返りで、他校の様子を聞いてもそのような子どもは一定数いたという話題になった。このような子どもが、文部科学省のいう「二極化」の「運動嫌い」「体育嫌い」な子どもなのではないかと感じた。体育が嫌いな子どもにとってその時間は、きっと大きな苦痛であり、孤独を感じてしまう時間となるのではないだろうか。そして、学びの少ない時間で終わっているのではないだろうか。子ども一人一人が取り組む過程において、もっと追求したい、学んでみたい、挑戦したいと思えるような教材（学習材）や、授業づくりができないだろうか考えた。

また、スポーツ庁（2018）¹⁾の全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果報告書によると、過去5年間（平成25年～平成29年度実施）に行われた小学校5年生と中学校2年生の体力測定の結果などから、中学校女子では「ほとんど運動をしない」という割合が約2割存在することが分かった。これらのことか

ら、子どもが体育に対して好意的な感情をもつことが、「運動嫌い」「体育嫌い」な生徒を減少させ、さらには「運動習慣の二極化」改善への第一歩に繋がるのではないかと考えた。

2 新学習指導要領と子ども観

新学習指導要領（H.29 告示）では、スポーツを「する」「みる」「支える」に新たに「知る」の要素が加えられた。スポーツ庁はその意図を、『運動そのものの知識を増やすこと』、そして運動を通じて身体や心によい影響があることを『知る』ことで、スポーツをより身近に感じてもらうのが目的である。また、体験で得た知識は『する』スポーツだけでなく、『みる』楽しさや『ささえる』楽しさへとつながっていく。スポーツを様々な方向から捉えることで、興味・関心を持つ可能性が広がる¹⁾とし、運動を苦手と感じている子どもに対しての指導方法と、運動を「知る」意義の提示が記載されており、「自分なりの楽しみ方への追求を保証すること」に重きが置かれている。

また、平野（2017）²⁾は「主体性というのは、子どもに新たにつけていくものではない。子どもはすでにそれなりに主体的に行動しているのであって、その主体性が発揮できる場（環境）に置かれ、主体的に行動していく

過程で、その主体性が洗練され、強化され、向上していくのである」と述べている。筆者は、新学習指導要領や平野の子ども観からも、「運動嫌い」「体育嫌い」な生徒が主体的に運動へ取り組める授業を様々な視点から考えていく必要性はあるのではないかと考えた。

3 先行研究の探索

蝦名ら(2018)³⁾は中学校男子に「運動好きの体育好き」が多く、中学校女子に「運動嫌いの体育嫌い」が多いことを報告している。また、「中学校の『運動嫌いの体育嫌い』を生む要因として考えられるのは、生徒が体育の授業内容や教員の指導、コミュニケーションの方法に不満を持っており、授業の中で良い経験をしていないため体育を嫌いなり、体育の中での運動への悪い印象が運動嫌いを生んでいるといえる。」とし、体育授業改善の必要性を指摘している。

体育授業においては十分に満足する時間を保証し、「楽しかった」と思う機会を増やすことができれば、運動能力の向上だけでなく、生涯にわたって運動が習慣化していく大きなきっかけとなるのではないだろうか。子どもには「できる」「できない」だけではない運動の価値、つまり「楽しさ」や「喜び」を味わってもらいたい。運動とは、必ずしもうまくならなければいけない、勝たなければいけないものではない。体育の授業を通して、運動の楽しさや必要性を実感し、関心・意欲を育むことで、「運動嫌い」「体育嫌い」の子どもが減少し、生涯にわたる心身の健康の保持増進や、豊かなスポーツライフの実現に繋が

っていくのではないかと考え、子どもが主体的に取り組むことができる授業づくりのあり方を課題とした。

4 研究方法

- (1)先行実践研究を探索し、全ての生徒が体育に積極的に参加できる授業のあり方の知見を知る。
- (2)教育実践FW Iにおいて、生徒の実態を知る。
- (3)調査した実態からそれら全ての生徒が運動に親しみを持つことができる授業を構想する。
- (4)教育実践FW IIにおいて、授業実践を行い、生徒の運動共感性について調査する。
- (5)実践した授業において、生徒の運動に対する共感性の変化についてまとめる

5 参考文献

- 1) スポーツ庁「～子供の運動習慣における課題とは～「二極化」の改善に取り組む「体育」の優良事例をレポート！」スポーツ庁 Web 広報マガジン (2018年3月27日)
<https://sports.go.jp/special/case/childrens-habit-of-physical-activity.html>
- 2) 平野朝久「はじめに子どもありき」東洋館出版社 (2017年3月30日) P.67
- 3) 蝦名 秀哉, 高見 京太「中高生における運動および体育に対する好き嫌いの実態と要因の観点から「よい体育の授業」を検討する」法政大学スポーツ健康学部 (2018年3月30日) P.11

運動の本質的なおもしろさに夢中にさせる授業づくり

芸術・体育系教科実践高度化コース

保健体育科教育実践分野

実習責任教員 湯口雅史

20849018 江尻沙和香

1 テーマ設定の理由

(1) 中学・高校教員時代の体育授業づくり反省点

筆者は、集団種目における体育授業づくりをする際、「練習→試合→テスト」の流れを基本とし構想し、「練習」は各種目の必要なスキル練習を数時間行い、その後の「試合」で練習した成果を発揮するように生徒に求めている。そして、単元終盤にはスキルテストを行うという単元構成だった。限られた時数の中で、練習時間を取り入れても運動の得意な生徒はどんどん上達していくが、不得意な生徒は「やらされている感」が出てきてしまい、あまり上達に繋がっていないように思う。練習の時間に行っている内容は、試合にはあまり反映されず、スキルテストには有効に働いており、総括的な評価に大きく影響していた。さらに、試合は公式ルール通りに行うことが多かったため、得意な生徒はどんどん活躍して、活躍できない生徒は目立たないように取り組んでいる様子であったと振り返っている。

(2) 本年度に実施した教科課題設定FW

フィールドワーク(10月28日～11月20日)で小学校の授業を観察した。マットや鉄棒の実技テストの時間が設定されていた。「自分の力に合っていない難易度の高い技に挑戦している」「鉄棒に恐怖を覚えなかなか取り組もうとしない」という

姿が見られた。なかなか取り組もうとしない子どもは、次第に他の子にちょっかいを出したりしていた。技能の高い子は意欲的に挑戦し、技を達成していた。

(3) 鳴門教育大学附属中学校で課題探求

授業(中学2年生対象, 10月27日実施)

課題探求授業では、バレーボールの授業を担当させてもらった。ネット型の本質的なおもしろさは「相手コートにボールを落とすか自コートに落とさせないか」と設定した¹⁾。これまでの経験から、授業時にオフィシャルルールで試合をした場合、サーブの正否で試合が決まってしまうたり、攻防が行えないまま単元が終了してしまったりするケースが多かった。そこで、本授業では、「ボールの落とし合いに夢中になるためには？」という局面に着目し、場・教材を工夫して、「ワンバウンドバレー」の授業実践を行った。実際の授業の様子、生徒からの授業後アンケートを振り返ってみると、大多数の生徒が積極的に参加し、各チームの課題解決へ向けて取り組んでいたと評価している。

(4) 今後へ向けて

上述から考えると、子どもが「運動の本質的なおもしろさ」を味わえず、体育の授業への充実感がないまま単元が終了してしまっているケースが多く、体育を好きになれない子どもが育っているのではないかと危機感をもつ。

体育授業に参加できていない子がいるという悲しい現実には、教師であれば誰もが気づいているはずである。例えば、ボールに全然触れられない、得点したことなんて1回もない、何もせずただコートの後ろや隅っこで突っ立っている、という子どもは何らの学びも存在していない現実にもなる²⁾。

また、筆者は運動と言ったら「できなければならない、勝たなければならない」そのような意識が働いていた時期があったかもしれない。このことは、「できる」ことだけ目的にしてしまうと、自分がやりたい気持ちより、できなくてはいけない、評価されなければならない、という義務感が先立つようになり、結局、誰のために頑張っているのか理解できず、体育授業以外でも運動から離れてしまうかもしれない。授業に参加している全ての子どもが、行う運動に対して「真に面白い」と感じ、その運動に参加する中で生まれた課題に、積極的に挑戦していく姿が見える授業を具体化しなければならないと考えた。

2 先行実践研究の探索

松田は、「運動の本質的なおもしろさとは、その運動が持っているおもしろさ、その運動に触れた時に誰もが夢中になれるおもしろさ」としている³⁾。この「本質的なおもしろさ」を味わうためには、「その運動を行うこと自体がおもしろい」という状況を作り出す場や教材が不可欠である。しかし、気をつけなければいけないのは、「運動の本質的なおもしろさ」を味わう授業を設定すれば、全ての子どもが自らの課題に気づき、課題解決していけるのかと言えば、そうではない。本質的なおもしろさ

を味わう中で生じてくる課題に取り組むことが学ぶ内容として教師が取り出し、大切にしていかなければならない。

3 研究手順

- ①文献・先行実践研究を参考に教科の本質と体育科で育てなければならない子どもの姿を検討する。
- ②教科課題フィールドワークⅠにおいて児童の実態、体育授業の実際を観察する。
- ③運動の本質的なおもしろさを味わうことを軸とした授業づくりのあり方を理解し、教科課題フィールドワークⅡで行う実践の授業構想をする。
- ④授業実践を行い、子どもの感想と授業記録から運動の本質的なおもしろさへのアプローチの様子を分析する。
- ⑤分析をもとに運動の本質的なおもしろさを軸とした授業のつくり方を整理する。

引用・参考文献

- 1) 徳島県小学校体育連盟研修部
本質的なおもしろさ、本質的な問い及び授業づくりの軸 一覧票
第57回中・四国小学校体育研究大会 研究紀要
徳島市津田小学校 2019年11月発行 P.22
- 2) 鈴木秀人
改めて体育における主体的な学習の在り方を考える
保健体育ジャーナル第106号
(株)学研教育みらい 2015年10月発行
PP.1-4
- 3) 松田恵示
「戦術学習」から「局面学習」へ
「遊び」から考える体育の学習指導
(有)創文企画 2016年10月発行
PP.70-76

「子どもの主体性を発揮させる体育科の授業づくり」
～「まなびほぐし」の考え方を活かして～

芸術・体育系教科実践高度化コース

保健体育科教育実践分野

佐川寛和

実習責任教員 湯口雅史

1 テーマ設定の理由

(1) フィールドワークでの学び

本年(R2)度実施された教科教育課題設定FW(10月26日～11月25日)において、筆者が受けてきた小学校体育科の授業と、現在実施されている授業とは大きく異なっていると感じた。FW校では、競技スポーツがもつ特性を損なわず、ルールの簡略化や場の工夫が行われた実践であった。競技そのものを教えるのではなく、子どもに合わせたルールや場にする事で、意欲的な授業への参加を保障していた。今年度から全面実施された学習指導要領(H29告示)の改訂の意図からも、子ども主体の授業を構築していかなければならない。今まで私が知り得なかった考え方であり、まだまだ勉強不足な面があると感じたことから、本研究に対して関心をもった。

(2) 講義の中で学んだこと

講義の中で、用具や補助を工夫することによって、運動することが苦手な児童に対する支援について学ぶ機会が多くあった。しかし、体格が大きい児童や腕の力がそもそも足りていない児童等については、場の工夫やめあて修正等が必要なことも知った。さらに、多様な個性をもつ児童に対しても、自分の成長を感じ取れるような場づくりをしていきたいと感じた。

(3) 文部科学省中央審議会答申から見てきたこと

平成28年度に文部科学省中央審議会より答申が出された¹⁾。この答申では、「習得した知識や技能を活用して課題解決することや、学習したことを相手に分かりやすく伝えること等に課題がある」と、体育科における課題が挙げられている。このことから、児童は体育の学習で得た知識や技能を、自分たちに合った形で活用する力が不足していると読み取れる。こうした活用する力は、知識及び技能の習得場面に埋め込まれている必要があるのではないかと考える。

また、学習指導要領(H29告示)²⁾では「主体的、対話的で深い学び」という記述が追加され、小学校体育科が従来行ってきた学びから大きく変わっている印象を持った。

筆者は、上述したFWで多くの学びを得た。その一方で、体育の授業中に、活動に飽きてくる児童も見られた。この児童は、跳び箱運動の授業において、できる技を行うことで周りからの評価を得られるため、新しい挑戦に踏み出すことができなかった。運動の得意・不得意に関係なく誰もが積極的な授業参加がき、児童それぞれが得た知識を自分自身に合うように分解・編成し活用できるような授業づくりをしていきたいと思うようになった。

3 先行研究の探索

荻宿ら³⁾は、「まなびほぐし」について、「これまでの「まなび」を通して身に付いてしまっている「型」としてのまなび方を問い直し、「解体」し、組み替えること」と定義している。つまり、体育学習においては、これまで教師から提供される情報を習得するだけだった学びから、自ら場や状況に身を置き、そこに必要な技能を構成するという、技能を学ぶ面白さを学ぶということであると解釈する。そして、「まなびほぐし」が起こる場として、社会構成主義としての学習論をふまえた「参加体験型のグループ学習」であるワークショップを提案している⁴⁾。

松田(2016)⁵⁾は、体育学習において社会構成主義からのアプローチの大切さを説いている。体育学習は、「運動の特性」を中心として授業構成を考えるが、多様な捉え方がされていることを指摘している。そして、多様な捉え方の「運動の特性」を4つ(認知主義、行動主義、心理学的構成主義、社会的構成主義)に整理している。

また、それぞれを「認知主義」は「わかること」、「行動主義」は「できること」を考えている。一方で、「心理学的構成主義」は「感じとること」、「社会的構成主義」は「わかちあうこと」が学習とし、教師の仕事は「整えてあげること」「参加を促し支えること」が大切であると述べている。

4 研究方法

- ① 新しい体育学習の授業づくりについて、先行実践研究を探索する。
- ② 教科課題設定フィールドワークⅠにおいて、学習参加の様子を主体性の観点から授業を観察し、記録にまとめる。

- ③ 観察をもとに、教科課題設定フィールドワークⅡで実践する授業を構想する。
- ④ 授業実践を行い、子どもの学びの様子を、形成的に調査する⁶⁾。
- ⑤ 調査データを分析し、主体的な授業参加が実現する授業づくりの方策についてまとめる。

参考文献

- 1) 文部科学省中央審議会答申 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について 2016 p.186
- 2) 文部科学省 小学校学習指導要領(H29告示)解説 体育編 2017
- 3) 荻宿俊文・佐伯胖・高木光太郎 ワークショップと学び1まなぶを学ぶ 東京大学出版会 2012 p.62
- 4) 荻宿俊文・佐伯胖・高木光太郎 ワークショップと学び2場づくりとしての学び 東京大学出版会 2012
- 5) 松田恵示 「遊び」から考える体育の学習指導 創文企画 2016
- 6) 小松崎敏・米村耕平・三宅健司・長谷川悦示・高橋健夫 体育授業における児童の集団的・協力的活動を評価する形成的評価票の作成 スポーツ教育研究 Vol.21, No.2 2001 p.p.57-68

「体育授業における子ども同士の教え合い活動」

芸術・体育系教科実践高度化コース

保健体育科教育実践分野

安岡秀人

実習責任教員 松井敦典

緒言

現在のコロナ禍の学校生活で、日本特有の問題に1学級の人数が多いということが挙げられる。これにより、教室内でソーシャルディスタンスを取ることが難しく、分散登校を余儀なくされた。また、日本の学級規模の大きさは、教育内容の変化や今の子どもたちの実態に照らし合わせると、かなり無理があると言われている。諸外国に目を向けると、日本の1学級の人数の平均は、OECD加盟国の平均より、かなり多くなっている。体育の授業の視点から見ると、個人指導の時間が、十分に取れていないように感じ、クラス全員に教師の目が行き届かず、1時間の中で個に応じた指導はできないと考える。そこで、子ども同士の教え合い活動が必要になってくるのではないかと考える。しかし、子ども同士の教え合いでの的確な指導をするのはとても難しい。筆者は、子ども同士の教え合い活動を有用なものにするためには、どのような方法が良いかを考察していきたい。

課題研究に至った経緯

この課題研究に至った経緯は、第1回目のフィールドワークを通して、教師の目が全員に行き届いていないと感じた。それによって、運動が苦手な子どもの多数が、自分は

何をしてよいかわからずに、友達とおしゃべりをしていたり、どのようにすれば技ができるようになるかの術がわからず、同じミスを繰り返している。運動が得意な子どもも、課題である技ができてしまうと、遊んでいたりしている様子も見られた。このように、クラスの中で、積極的に授業に参加できていなかったり、体育を楽しむことができていない子どもが多く見られた。しかし、これを改善するために、苦手な子どもにばかり教えてしまっているのは、得意な子どもが退屈してしまい、得意な子どもにばかり教えていても、苦手な子どもは成長することがないだろう。だからこそ、実践研究では、クラス全員に先生の手が回らずとも、運動が得意な子どもも苦手な子どもも、体育を楽しむことができ、共にレベルアップできる術はないのかと考えた。そこで、課題が先にできた、運動の得意な子どもが、課題がまだできていない苦手な子どもに教えることができればよいのではないかと考えた。この構図は、他の教科では、よく行われている光景だが、体育では、あまり見ないように感じる。これはなぜかを考えると、自分ではできていても、教えるとなると難しいのではないだろうか。また、苦手な子どもがなぜできていないかの原因が掴みにくいことも挙げられる。そこで、運動が得意な子どもに、技の見るべきポイントを、簡単に、かつ明確

に伝えてあげると、苦手な子どもに教えてあげやすくなるのではないかと考えた。

方法

方法としては、子どもたちにアンケート調査及び、授業後の振り返りシートを記入してもらい、実践の授業を行う前と行った後の変化を記録し、それぞれどのように変化したのかをグラフ化し、どの項目で有意差が表れたのかを確認する。授業実践によって、教える側の子どもは、「教えることが楽しくなった」など、教えられる側は、「授業は楽しかったか」や、「友達に教えてもらって、自分は上達できたか」などを項目として挙げていきたいと考える。

実践研究

授業実践として気をつけておきたいのが、子どもに教えさせるということばかりに重点を置きすぎずに、あくまで、子どもが楽しいと思える授業、自分自身が成長できたと思う授業作りが大切になってくる。4月から行われる「教科実践フィールドワークⅠ」での実習先の配属校の競技はまだ決まっていないが、中学校の実習先ということは決定しており、様々な体育の授業を予測して、対策しておかなければいけない。例えば、バスケットボールの授業を実践すると予測する。シュート練習で、リングに届かない子どもの、筋力以外の要因は、足の力を使えていないことや、ボールを前に投げてしまうといったことが挙げられる。こういった子どもを教えるために、教師は、教える立場の子どもに、「膝を曲げてシュートを打っている

か」などの、見るのが簡単で、わかりやすいポイントを伝えることが大切になってくると考えます。また、どのレベルのポイントまで、子ども同士で教え合うことができるかも知りたいので、例えば、パスの練習で、ボールを取ることが苦手な子どもに、「包み込むように取る」などの少し曖昧で難しいポイントも授業で扱っていきたいと考える。このように子ども同士の教え合いで、子どもたちは、理解できたのか、教えることは難しかったのかなど、どのように感じるかを内在化していきたい。

結果の予想

結果の予想としては、「友達に教えてもらい、楽しくできた」、「教えることで、自分のためにもなった」、「教えることの楽しさを感じた」などといった肯定的に感じる子どもと、「自分ができないところを見られるのが嫌」、「説明がわかりにくかった」などという否定的な意見の両方が予想される。それでも、運動が得意な子ども、苦手な子どもの両方が、体育の楽しさを感じたり、自分自身の成長を感じることができるようになるのではないかと考える。

参考文献

magacol (2020) 1 クラスの生徒の人数、海外の平均は日本の約半数
<https://magacol.jp/2020/11/13/365518.html> (参照日 2021年1月29日)

体育授業における準備運動についての実践研究

-動きづくり・身体づくりの視点から-

高度学校教育専攻 教科実践高度化系

実習責任教員 松 井 敦 典

芸術・体育系教科実践高度化コース

実習指導教員 南 隆 尚

保健体育科教育実践分野

篠 原 健 真

キーワード：準備運動，傷害予防，体づくり運動，調整力

I. 緒言

小学校学習指導要領(平成29年告示)解説体育編では、現行学習指導要領の成果として、豊かなスポーツライフを実現するためのスポーツへの多様な関わり方や運動・スポーツを愛好する児童生徒の割合の高まりなど、一定の成果が見られたことが示されている。一方で、知識技能の活用や学習したことを表現すること、体力の二極化など課題も挙げられている。

これらのことを踏まえた体育科、保健体育科の目標は小学校、中学校及び高等学校を通じて、「心と体を一体としてとらえ、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成することを重視する観点から、運動や健康に関する課題を発見し、その解決を図る主体的・協働的な学習を通して、『知識・技能』、『思考力・判断力・表現力等』、『学びに向かう力・人間性等』を育成すること」と示されている。具体的事項として、オリンピック・パラリンピックに関することや、全ての児童が楽しく安心して運動に取り組むことを通じて体力の向上につながる指導の在り方の改善を図ることが求められている。体力の向上は、心身ともに成長の著しい時期であることを踏まえ「体づくり運動」の学習を通して、様々な基本的な体の動きを身に付けるとともに、健康や体力の状況に応じて体力を高める必要性を認識できるよう指導することが示さ

れている。世の中の体育・スポーツを取り巻く環境の多様化に伴い、学校体育授業に求められることも多様化している。

これらのことに取り組んでいくためには、教科領域における専門性と実践力を有することが求められる。しかし、近年の学校現場は様々な教育課題や働き方改革などへの対応に直面し教科の専門性を高めたり、実践力を磨いたりするための時間を確保することが困難な状況である。小学校では体育の専門性(中学校及び高等学校保健体育免許取得に必要な基礎科目の内容を理解していることを指す)を有した教師が指導することが難しい。体育授業の指導に関する内容についての置籍校での聴き取りからも、教師は体育授業での指導の重要性は認識しているものの、十分な授業準備を行う時間が確保できない、体育の指導に対する不安、自身の授業力を高めるための普段の取り組みが難しい、などの課題があると考えられる。

以上のことから、本実践研究では身体教育の視点に立ち返り、体力の向上を目的とした、動きづくり・身体づくりの視点から体育授業における準備運動の内容について検討する。

II. 研究内容について

多様な課題に対する取り組みが求められている体育授業では、体力の向上に関する内容について各種の運動を適切に行った結果として体力の向上が図られることが重要であるとされてい

る。それと同時に自己の体力や体の状態に応じた高め方を理解すること、体力の向上を図るための実践力を身に付けることが求められている。また、体力が人間の活動の源であり、健康の維持のほか意欲や気力等の精神面の充実に関わっていることも示され、学習指導要領上では「体力」という言葉が広義で用いられている。体育の授業場面で行われる各運動領域の運動は複合的なものであり、かつ強度も動きの種類も多種多様で各個人の取り組み方による影響が大きい。そして、各運動領域や単元によっても、動きの違いがあり、それら個々の動きと体力要素の結びつきを明確にすることは困難である。児童生徒が自身の状況に応じた体力向上のための実践力を身に付けるためには、行う個々の運動とその効果を理解することが必要である。そこで、神経系の発達段階も考慮して、本実践でねらいとする体力は、身体的要素である行動体力の中の調整力(平衡性, 柔軟性, 敏捷性)とする。行う運動とその効果の関係について子どもなりに理解し、そのこともとに各個人が継続的に取り組むことができるよう授業で取り扱い、指導することが必要である。

準備運動は、どの運動領域・単元においても年間を通して実施する。その内容は、一般的なものと種目固有のものに分類することができ、体力や運動能力向上を狙ったものや怪我の防止のためのものなど多岐に渡るが、活動の性質上、目的に応じた個々の動きや強度を教師がコントロール可能であり、ねらいとした運動を指導することができる。また個人で実施できる内容であることから児童生徒が学習したことをもとに授業時間外でも取り組むことができる。

準備運動を充実させるためには、教師が各種の動きについての目的と効果を理解することも

必要である。前述した通り、教師の教材研究に費やす時間確保が難しい現状を踏まえると、教科の専門性を生かした専門職大学院の実践研究が学校現場の問題解決に取り組むものになる必要がある。また、学校で行われる様々な教育的営みが科学的根拠に裏打ちされたものにすることも同様の必要性がある。本実践を置籍校の教師と取り組むことを通して、実践の背景にある体育の専門的理論と指導の在り方について共に学ぶ機会にすることも期待できる。理論に裏打ちされた効果的な実践は、学校における体力向上のための取り組みの一助になるのではないだろうか。

III. 今後の計画

次のような計画で実践を行う予定である。

i. 事前準備

- 置籍校の教師に対する準備運動に関する調査用紙の作成。
- 運動における調整力を高めるための運動とその効果についての情報収集と理論化。
- 慢性障害についての情報収集と整理。
- 準備運動プログラムの考案。
- 教師向けの研修資料の作成。

ii. 実践

- 実践研究の主旨及び実践方法の説明。
- 教師の準備運動に関する実態調査。
- 準備運動の実践。
- 発達段階や子どもの実態、教師の指導の視点での適宜改善。
- 情報発信方法の検討。

iii. 事後

- 教師の準備運動に関する事後調査。
- 準備運動プログラムのパッケージ化。
- 教材研究用資料の作成。
- 情報発信の準備と実行。

教育の一番札所



国立大学法人

鳴門教育大学

編集・印刷・発行

第3版令和3年2月9日

保健体育科教育分野抄録集作成チーム